

加茂里山通信

平成22年 新年号

発行 市原商工会議所
加茂里山通信編集部
発行責任者・編集長
征矢 貴造



祝加茂地区成人式

祝新成人

1月10日(日) 加茂公民館において加茂地区成人式。
加茂中卒業生63名のうちインフルエンザによる欠席者1名。

祝！新成人

1月10日(日) 加茂公民館において加茂地区成人式が行われました。
新成人は 加茂中卒業生63名とその他3名の合計66名です。
インフルエンザで、残念ながら出席できなかった女性が1名いらしたようですが、例年の出席率の高さそのままに、今年も新成人の門出を祝う祝典となりました。
ここ数年、実行委員会に新成人も加わり、準備から式運営に至るまで、手作りの成人式が行われてきましたが、今年は司会進行

も新成人に任せられ、国歌斉唱の伴奏と指揮、花束贈呈や謝辞と緊張がうかがわれながらも、なかなか立派な式典運営をしてくれました。
市長の代理として、山中教育委員長に祝辞をいただきましたが、実は他の会場を指定されていたそうです。
しかし、どうしても加茂会場に行きたいと自ら希望されたので来場だったと内幕を披露されていました。
地域の活性化に住民自らが取り組む姿勢の素晴らしさが、行政の中でも注目されている加茂地区の、次の時代を担う若者達にお祝いの言葉を贈りたかったというのがその理由だそうです。

越後へ
越後湯沢から1時間に1本走るローカル線に乗り換えて約1時間40分。目的地は山間地帯である。
地名の由来は、越後の「どん詰まり」からきているといわれる。成程、山の中の集落なのである。
冬になれば豪雪となり、12mの積雪を記録したこともあるという。
地域の人口は6千数百。高齢化率は31%を超えているとのこと。
過疎化が進み、学校も統合を進め、空き家が目立つこの地域は、道を通っても、コンビニやYショップなんか無い。スーパーなんかはほとんど無い。「いったいどこで買い物をするのさ」と心配になってくるような所である。
*加茂はすっげー都会に思えてくるのである。

加茂の初夢

10年前
西暦2000年の春。
この地域を都会の学生を中心にした若者達が歩き始めた。残雪深い集落を戸別訪問して「芸術祭」を説明して回ったのである。
「都会で何をやっているのか分からない学生」が「過疎の山間地で農林業をやってきたお年寄り」に「アートという訳のわからないものを説明し、「土地を貸してくれ」とか「手伝ってほしい」と言うのである。
豪雪の山間地は閉鎖的である。当然のように、学生たちは怒られ、水をかけられ、泣きながら宿舎に戻ったという。
しかし県と市に後押しされた学生たちは懲りずに訪問を重ねた。やがて少しずつ理解者が現れ始めた。
若者達の素直さは、地域のお年寄りたちに新鮮な風のように映ったのだろう。
地域、ジャンル、世代の違う人間の出会い、衝突、困惑から学習、理解、協働へと進化した。

大地の芸術祭
2000年の夏。
日本のみならず海外の若手作家の作品が地域のあちこちに置かれた。
準備も大変である。「棚田は耕作されているからきれいなのだ」とやめたい田んぼもやめられず、土手の草もいつもより丁寧に刈られた。
廃材を現地調達して大きな芸術に作り替え、廃屋にも手を入れて作品とした。廃校は校舎も体育館も芸術品にされた。製作には地元のお年寄り、消防団も手伝いに入り、お母ちゃんたちは握り飯やお茶の差し入れで忙しかった。
芸術作品は、その数、約300。開催期間50日間。この年の芸術祭に訪れた観光客は10数万人。
越後湯沢からローカル線に乗り換えて、過疎の山間地まで来訪した人たちの数である。
各国の大使館も自国の芸術家の作品を鑑賞しようと訪れた。過疎の山間地に外人さんが大勢来たのである。
その後、03年、06年と芸術祭が開催され、来訪者は増え続けていく。
■芸術祭の行方
県と市は3年ごとの開催で3回は大地の芸術祭をやろうと、初めから決めていた。
作品は常設もあれば、その都度作られるものもある。そのたびに若手芸術家と地元民の協働が行われるのである。
2009年。県は約束通り手を引いた。市は財政難である。正直やめた。
しかし地元は「やってくれ」の大合唱である。初めは、あれだけ反対したのに。
10年前には「芸術なんて訳のわからないので地域は良くならない」と議会でも揉めに揉めたはずなのに、今度は「やめさせない」と決議された。
そして4回目の開催。
50日間の来訪者は40万人弱。平均なら日に8千人に近い人が訪れたことになる。
土産物を売る売店の売り上げは最高で1日200万円。
何度も言うようだが過疎の山間地のことである。

「夢」が「夢」で終わらないように... (大曾根里山通信員)

第36回 高滝湖マラソン



1月9日(土) 開催の高滝湖マラソンは2,389人の参加者でにぎわいました。

当たり前前を過ぎて

ドラマ「北の国から」などで知られる脚本家・倉本聰氏が毎日新聞で六回にわたりに思うところを述べていました。彼は三〇年以上前にNHKとけんかして、北海道に移り住み、そこで俳優と脚本家の養成所となる富良野塾をつくりました。塾は受験料・入学金・授業料なし。但し、自分たちで家を建て、農繁期に働き、自分たちでお金のやりくりをして食べていくというものでした。

その塾と塾生たちの初期の苦闘の話は『谷は眠っていた』という作品となり、また芝居ともなりました。

東京で観たその芝居は鮮烈な印象と深い感動を残し、今でも忘れられません。

その塾もこの春に二五期生を最後に閉塾するそうです。

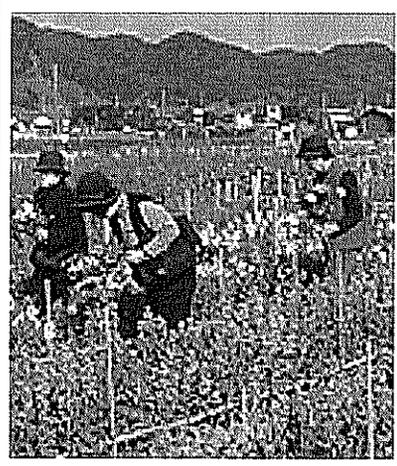
この塾生たちに生活する上で何が必要かと尋ねたことがあって、そのときの答えが一・水 二・火 三・ナイフ 四・食料でした。これを聞いたプロデューサーが渋谷で同年代の若者に同じ質問をしたときの答えが一・カネ 二・携帯 三・テレビ 四・車でした。

その倉本氏が富良野での三二年の暮らしの中でずっと考えてきたことがあったといえます。

それは「当たり前前暮らしとは何か」ということです。

そしてついにそれが「自然の掟に従うこと」に思い至ったそうです。

そしてアイヌ資料館創設者萱野茂氏のこんな言葉を引用しています。



「アイヌは その年の自然の『利子』の一部で、食うことも住むことも、着ることも全部やってきた。

今の人間は自然という『元本』に手をつけている。

『元本』に手をついたら『利子』がどんどん減ることを、これだけ経済観念が発達した日本人がなぜわからないのか」

地球という限られた星の、さらにその半径の三〇〇分の一しかない限られた表面でしか生きられない私たちが、元本に手をつけ始めたころから、温暖化の問題、大気や環境の汚染の問題、食料の偏りや飢餓の問題などが派生してきたとも言えます。

あたり前の暮らしとは何か。そもそも当たり前前とはなにか。自然の掟とは何か。自然に囲まれた富良野ではなく、ビルの林立する都市社会においても成し得ることなのか。そんな疑問も生まれてきますが、元本を大事にしなければ利子もなくなるという単純なことにはよくわかります。

元本を残し、利子の一部で生活していた江戸時代などは実によくできたリサイクル社会でもあったようです。

里山からの発信

里山の医療からへ

飛べないペンギン

話をもっと小さく、自分たちのこの地域、さらに自分たちの生活にまで目線を降ろしてみると、受け継ぐべきものを受け継ぎ、やるべきことをやり、自然の恵みに感謝し、四季を楽しみ、質素でいながら心豊かな生活を営み、喜怒哀楽のあるごく自然な生活。そういうものが当たり前前前生活なのかと思えてきます。

そして、こう書いていると死の直前に「アラユルコトヲ ジブンヲカンジョウニ イレズニ ヨクミキキシワカリ ソシテワスレズ」「ミンナニデクノボートヨバレ ホメラレモセズ クニモサレズ サウイウモノニ ワタシハナリタイ」という理想とも願望とも言える詩を書いた詩人のことがどうしても思い起こされてしまいます。

当たり前前暮らしとはそういう事なのかと。



医療側は、住民に十分な情報を出していないと感じました。

実は私も、発熱した子供を市外の病院に運んだとき『だれかどうにかして欲しい』と思っていました。

この『だれかどうにか』を『自分にできることは何か』に変えようと思い、『地域医療を育てる会』を立ち上げたのです。...

その点から、『情報の発信』と対話の場づくりを二本柱に活動を始めました。

医師不足の背景や現場の過酷な状況などを取材し、『ミニコミ誌『FLOWER』』で発信しています。

それだけでは一方通行になりやすいので、住民と医療・行政が知恵を出し合う対話の場として、学習会や講演会を続けています。

私は、医療崩壊には『（言いたいことを抱えながら）黙って立ち去る医師』と『専門家に任せの（苦情だけは言う）住民』の両方に責任があると思います。

ですから『地域医療を育てる』とは『地域に腰をすえて発信する医師』と『医療再生のために行動する住民』を育てることだと考えています。

地域医療を育てるといふ発想、自分のできることはなにかという視点、それらはやはり地域医療の問題を抱えるこの地域の、これからの取り組みにも生かせることだと思えます。

ただし、病院長の理解が最低限の条件であるとも述べていました。

この講演は、全く別な方向からの取り組みがあることを知る有意義なものでしたが、この日最も印象に残ったのは最後の質疑応答になってからのことでした。

主催者側が彼女に「行政にはどのような働きかけをしているのか」と質問したところ、彼女は「それはペンギンに飛べと言おうようなものです。飛べないペンギンに飛べと言おうのは、言う方が悪いんです」と答えました。

この時一人の女性が手を挙げて次のような発言をしたのです。

「飛べないペンギンでも、旭山動物園のペンギンは水中をまるで飛ぶように泳いでいます。行政にも橋渡しだとか何か出来ることはあるんじゃないでしょうか」

それはたとえとして挙げた話に対する鋭い切り返しでしたが、すべての可能性を捨ててしまわない、決してあきらめない取り組みを考えさせられ、心の中で喝采を送った人も多かったのではないかと思います。

(征矢里山通信員)

昨年十月に地域医療を考える講演会が南総公民館でありました。

講師は「NPO法人地域医療を育てる会」の理事長である藤本晴枝さんでした。

丁寧に順を追っての説明でわかりやすいものでした。

とかく病院や行政側に対する一方的な要望や要請になりがちなのところを、自分にできることは何かという視点から行動に結びつけていった彼女のやり方は、斬新な方法に思えました。

彼女はあるところでこう述べています。

「私が『育てる会』を結成したきっかけは、山武地域医療センター構想が提案され、アドバイザーとして参加したことです。

そのシンポジウムを聞いていて、私は住民と医療や行政との関係性に強い不安を感じました。

住民は要望を言うだけの依存的存在に見えました。

「飛べないペンギン」

「飛べないペンギンでも、旭山動物園のペンギンは水中をまるで飛ぶように泳いでいます。行政にも橋渡しだとか何か出来ることはあるんじゃないでしょうか」

それはたとえとして挙げた話に対する鋭い切り返しでしたが、すべての可能性を捨ててしまわない、決してあきらめない取り組みを考えさせられ、心の中で喝采を送った人も多かったのではないかと思います。

(征矢里山通信員)

加茂診療所のお知らせ

加茂診療所は 高滝小学校前に移転
昨年12月1日から診療を行っております。診療科目は内科と外科です

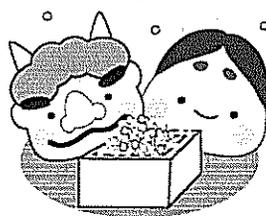
■受付時間

午前8時～午後11時30分
午後1時30分～午後5時

木・土曜日は午前中のみ診療
尚、日・祝日は、休診です。

問い合わせ 0436(98)1177

高瀧神社節分祭



節分は本来、季節の移り変わる時の意味で、立春・立夏・立秋・立冬の前日を指していましたが、特に立春が年の初めと考えられ、重要とされたことから、次第に立春の前日を節分と呼ぶようになりました。立春を新年と考えれば、節分は大晦日にあたり、前年の邪気を祓うという意味をこめて、追儺(ついな)の行事が行われていました。

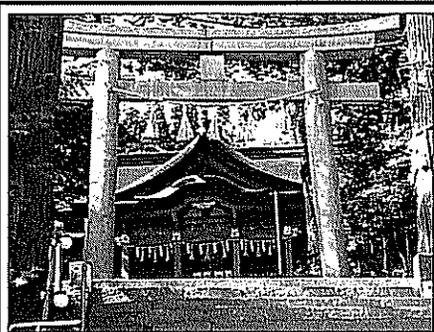
現在の節分においては豆まきをおこないますが、これも追儺(ついな)から始まったものとされています。

なぜ豆をまくかという点、古くから穀物には邪気を払う霊力があるといわれ、豆をまく事で豆の霊力により邪気を払い福を呼び込むと考えられていました。

また豆は魔を滅する意味の魔滅(まめ)に繋がることから豆は魔を滅し、鬼を払う道具でありながら鬼そのものと考えられていたようです。それ故に外に豆を投げながら「鬼は外」と唱えるのです。

皆さまも新しい年の始まりとして当社の節分祭に参加して邪気をはらい、一年の幸福をお祈りしてはいかがでしょうか。

(平田里山通信員)



節分祭 2月3日(水)
午後6時と7時に
福豆をまきます

追悼

佐久間眞明



加茂里山通信編集長

■佐久間眞明編集長が昨年十二月二三日に心筋梗塞で忽然と他界してしまいました。つい二日前には、電話で二五日に予定していた忘年会の話をしたばかりでした。

場所が集会所に変わったのでカラオケの心配をされていて、「大丈夫。ちゃんと持って行くから」と言うので安心したようでした。

またその前には自分は糖尿病を抱えているのに、「二五日だからケーキはやっぱり必要でしょう」と気にかけていました。そんないい奴でした。

彼が楽しみにしていた忘年会の日が通夜の目になってしまいました。

誰からも悪口や陰口をいわれることのない希有な存在で、みんなから「まーちゃん、まーちゃん」と親しまれた彼がいなくなってしまうのはこの里山通信にとっても本当に大きな痛手ですが、養老溪谷という地域にとっても大変に大きな損失です。

花火がなくなり、菊祭りがなくなり、だんだん元気のなくなる養老溪谷の活性化を本気で考え、菊祭りを復活させたいと何度も語っていました。

地域にとつて彼は、情報発信の中心であり、交流の拠点であり、溪谷に行けば角屋のまーちゃんがいるからと、みんなから信頼され、頼りにされていました。

その期待を裏切ることなく、一生懸命動いていた姿を誰もが知っています。誠実で人に優しい彼はみんなから愛された存在でした。

そんな彼が、私たち通信員の心の中に生きていたのは、まだ彼はもう一つの命を持っていきます。

彼が取り組んできた姿勢を継承し、さらににその先へ進むことこそが残された

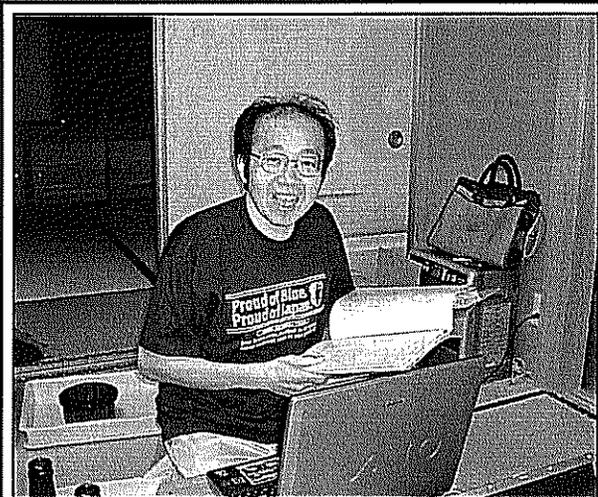
私たち通信員のはたすべき約束と考えています。
(征矢里山通信員)

■佐久間編集長が突然、本当に突然あつちの世界に旅立ってしまった。

思い出すのはあのひとつつこい笑顔と気配りである。編集会議でついつい話があらぬ方向に脱線しがちな部員に、笑顔でプレーキをかけて本来の議題に戻してくれた事も二度や三度ではなかった。

普段はめつたに自分の意見を声高に主張しない男が里山通信の編集長には決して自分の信念を曲げる事がなかったのが印象的である。

好漢惜しむべし落涙合掌
(鈴木里山通信員)



■それは突然の知らせであり、自分の耳を疑うとはこういうことなんだと思った。

牛久発「伝心柱」に触発され、加茂地区からも、何かしら情報誌を発行しようという話が出たとき、一番に目を輝かせ、今の原形(加茂地区の人しか解らんような話し等)を創ったのは、まーちゃんだった。

これから先、どれだけ続けられるか解らないけど、まーちゃんの意思だけは、忘れずに、皆で頑張っていくから、今は君のこ冥福を心から祈ります。合掌。
(戸澤里山通信員)

■12月23日(日)午後1時37分。携帯が鳴った。戸澤さんからだった。

「まさか、またエクセルのヘルプか?」と思ひ通話にすると「確定情報じゃないけど、編集長が亡くなったらしい」とのことだった。

編集長?亡くなった?なにを言っているのかさっぱり分からなかった。それが佐久間編集長急逝の第一報だった。

里山通信発行における献身的な働き振りについては多くを語るまでもないだろう。今になって事務局としての力不足を悔やむばかりである。

佐久間編集長のこ冥福を心よりお祈りいたします。
(北里山通信員)

■養老溪谷、そして加茂地区においても、大変貴重な人を亡くしてしまいました。

我が家では家族ぐるみでお世話になり、「まーちゃん!まーちゃん!」と親しんでいました。いつも笑顔で無理を言っても嫌な顔をせずに聞き入れてくれました。

そんなまーちゃんとの暖かい出来事で、我が家の小学校六年生の次男が家庭科の授業で巻き寿司を作る為に、まきす(巻き寿司を作る道具)を角屋商店に買いに行き「まきす、ありますか?」と聞くと、まーちゃんが、「最近、まきすは売れないからなかなかありません」とすると、まーちゃんが「それじゃ、家の貸してあげるから、これを使いなよ!」と、快く貸してくれました。

次男も喜んで小学校で巻き寿司を作り、御礼に、作った巻き寿司をまーちゃんに届けると「おいしい!おいしい!」と食べ、まーちゃんのすこいところは、来る人、来る人、みんなに気を使っていたこと、地元、養老溪谷の観光推進協議会などでも精力的にがんばっていました。

私もこれからは、まーちゃんが思っていたことを、少しでも叶えられる様にがんばって行こうと思います。

まーちゃん、本当にありがとう!ごさいいます。これからも天国で見守っていて下さい。

■佐久間編集長の突然の訃報に自分の耳を疑いました。里山通信の発行の時には大変親身になって原稿にアドバイスをしていただいたのが昨日のように思われます。いつも自分のような新米通信員に対して、改めて御礼申し上げたかったのですが、それも今となっては叶わぬ事となってしまいました。

これからは佐久間編集長の意志を受け継ぎ加茂地区の発展の為、色々な事を加茂地区以外にも発信できたらと思っています。
(平田里山通信員)

■あまりにも突然の訃報でした。12月23日の10時頃だったでしょうが近所の方とお茶を飲みながら、「加茂地区の活性化」を話題にしていました。

養老溪谷では「角屋のまーちゃんが頑張ってるよ」などと、あなたが地道に取り組んできたこと一端を紹介していたのですがまさか、その時、家の前を通った救急車の中で、あなたが生死の境で戦っているなんてことは想像もしませんでした。

里山通信の発行では、編集長のまーちゃんに頼りきったような形で、いつも脱線していくメンバーの話を「ニコニコしながら」「そろそろ本題に移りましょう」と軌道修正してくれていましたね。

ふるさとを愛し、ふるさとの未来を思い、ふるさとを語るまーちゃんに、いろいろな教えを頂きました。もう、あの語り合いの時間が持たないと思つたときみしい限りです。

「養老溪谷の観光案内人だから」と照れながら言うあなたの笑顔。お店を切り盛りしながら「いらつしやい」というあなたの声。そして誰からも「まーちゃん、まーちゃん」と親しまれた優しい人柄。

あなたとお別れをしなければならぬと思うと本当に、辛いです。あなたの愛した養老溪谷の山並み、川のせせらぎを見て、きつと、あなたを想うことでしょう。

どうか、色鮮やかに、あなたの愛したふるさとを四季を染め上げて下さい。

ご冥福をお祈りいたします。
(大曾根里山通信員)

加茂米くらぶ だより

昨年末、遠山あき先生に久しぶりにお会いする機会がありました。

その際の巻録(かくしやく)とした立ち居振る舞いは、以前と変わりなくお元気そうで、いまでも県内はもとより都内にも電車で出かけられ、ご活躍のこととお聞きしています。

同じ加茂在住というだけではありますが、ただ単にうれいという気持ちにさせられませんでした。

それから数時間後、わが編集長まーちゃん(の死を聞かされた時、驚きとともに表現のしようのない気持ちが湧き、なぜか「祇園精舎の鐘の音、諸行無常の響きあり」の一節が頭の中を駆け巡っていました。「生きる事」「生かされている事」って何だろうとあらためて考えさせられた出来事でした。

また、年のせいもありますが、年々一年間があつという間に過ぎ去り、年を重ねるようになりまして。さみしい話ではありますが、大晦日の晩、携帯電話の住所録から、知人、友人の真福を折りつつ登録を削除しました。やはり健康が一番。

皆様方にはご愛顧いただき、今年一年元気に過ごしていただきたいとおもいます。ペツペツ

例によって酒席のほなしです。A「いやー年もあけたことだし、いっぺいやっぺー」

B「あにいつてだよー、年があけたってあけねったって、いつもやってペーよ」

A「そんなこといって、きもちもんだいだいだっぺよ。酒ンあじもかわるつちゅうもんだよ」

B「そらーそーだっけど、それんしちやー吸い込みがわりーな」

A「そんじやー うんちんちかしてやっかー」ということで、二人ともうんちんちかしてペレケになった一月三日のことでした。(戸沢里山通信員)

魚屋の戯言



鈴木里山通信員

帆立貝の美味しい季節になりました。北の寒い地方が主産地の帆立は、やはり冬に旨味を増して来るようで、十月頃から旬を迎えます。

市場に出荷されている主な帆立は殻付き・剥き身・貝柱だけに加工されているもの、むき身を蒸すか茹でるかしたものが、それぞれに生と冷凍があります。

当店がよく仕入れるのは生の貝柱と蒸し帆立です。生は刺身やソテー・フライなどが美味しく、蒸し帆立は、甘露煮、照り焼き、或いはシチューに向いていますし、今の時期なら鍋料理もまた捨て難いものです。

貝の直径が三〜五cm程の稚貝も、時折り市場で見かけます。これは酒蒸しや炊き込みご飯がお勧め。

元来がコハク酸・アミノ酸・グルタミン酸という旨味成分を豊富に含んでいるので、どう調理しても美味しい貝ですが、刺身にする場合、是非とも生の貝柱を選んで下さい。

冷凍物の貝柱も出回ってはいますが食感もよくありませんし、独特の旨味もかなり落ちるのでお勧めできません。

値段は殻付きのもので一個二百〜三百円程度、蒸し帆立は一kg千五百円前後。昔と比べてずいぶん割安感があると感じています。

殻付きの場合は貝殻を鍋代わりにして直火で焼くと絶品。ウロと呼ばれる黒っぽい部分だけをナイフなどで外す事を忘れないで下さい。これは中腸腺と言う消化器官で餌のプランクトンを原因とする貝毒が蓄積されている事があり、稀にお腹を壊す事

があります調理前に除去すれば安全です。多くの場合はあらかじめお店で取り除いてあると思います。選ぶコツはなんと言っても鮮度が重要。口が半開きになっていて手を触れると一瞬で口を閉じるものが生きている帆立。これが一番新鮮です。こういう帆立が並んでるお店では時々海水を吹き出して服を濡らされる事があるので注意して歩いて下さい。口が閉まっていて手でこじ開けようとしても簡単に開かないのが死んだ直後。手で簡単に開いてしまうのが死んでから少し時間が経っているものと覚えておいて頂ければ役に立つ事があるかもしれません。寒い夜は鍋料理が美味しいです。昆布で取った出汁にたっぷりの野菜と帆立。自身の魚や牡蠣・更にはカニなどを入れて食べれば立ち上る湯気と美味しさで気持ちも身体も温まって大満足。ご家族の会話もきつと弾む事と思います。

宝船プレゼント

加茂里山通信では、今年も読者の皆様に、感謝の意をこめまして、宝船プレゼントを実施します。松、竹、梅の「三つ葉」3名と、「お年玉賞」7名、商工会議所加茂奉仕部からの協賛で、1組「10万円」相当の「超目玉賞・福袋」が3名、計13名様に当たります。皆さん奮って応募ください。住所・氏名・電話番号と里山通信への「意見、ご感想」を添えて「宝船希望」と明記してハガキで応募下さい。宛先は〒290-0081 市原市五井中央西1-22-25 市原商工会議所「加茂里山通信宝船プレゼント係」まで。〆切は2月7日消印有効。当選の方には直接連絡いたします。

読者の皆様へ

賞品の引渡し式は、2月21日(日) 午前10時。月崎の商工会議所加茂支部で行います。取りに来られない方は無効になりますのでご了承下さい。

編集後記

予告しておいた一月二〇日発行の通信が、二月一日発行となりました事をまずお詫び申し上げます。佐久間編集長亡き後、みんなで何とか仕上げました。しかし、これまで発行日の都合で載せることの出来なかつた加茂の新人の話を初めて載せることが出来ました。この地にとどまる人は少ないかもしれませんが、いずれこの地を担っていくべき人材です。あたたかく時に厳しく一人の大人として見守っていきましょう。里山通信はこの号で七年目の半ばを過ぎたところです。多くの皆様の声を励みに、螺旋(らせん)階段をゆっくり上るように、さらなる内容の充実を図って少しずつ進化させていけたらと考えています。(征矢里山通信員)

寒中お見舞い申し上げます

お買い物は 地元の商店で！
市原商工会議所
副会頭 根本 巍
市原商工会議所
加茂支部
支部長 征矢吉之助
役員一同

情報提供・取材依頼はお近くの通信員へメールでも受け付けます。尚、紙面及び記事に関するご意見・お問い合わせは、市原商工会議所 市原市五井中央西1-22-25 TEL0436(22)4305 担当 北まで Eメールアドレス kitai@cci.or.jp HPアドレス http://www.yo-to-kadoya.co.jp/kamoseinbu

房総・養老深谷の地酒お土産は 養老深谷駅前 角屋商店 養老深谷観光協会窓口 市原市朝生原181 TEL0436-96-1108 FAX0436-96-0052

愛車のある幸せを暮らし応援します！ 安全・安心 有限会社 小茶自動車 市原市石神227 TEL0436-96-0482 FAX0436-96-1293

HONKA 太陽工業株式会社 市原市馬立414-1 tel.95-5641 http://www.honka-bouso.com Today's homes. Naturally.